

埼玉県・サザンクロス大学スカラシップ事業レポート

麻生 瞳

はじめに

2017年2月10日から26日までの2週間、埼玉県の姉妹都市であるオーストラリア・クイーンズランド州・ゴールドコーストにあるサザンクロス大学に、短期留学をさせていただきました。

私がこの短期派遣に参加したいと思った理由は3つあります。

1つ目は、卒業を目前に控えた大学4年生の春休みに短期留学をすることで、英語力を伸ばし、将来仕事に役立てたいと考えたから。

2つ目は、大学3年生のときに内閣府青年国際交流事業でラトビアに派遣していただき、日本代表青年として活動した経験から、自分が生まれ育った埼玉についてもっと内外にアピールしてみたいと考えたから。

3つ目は、卒業論文でジェンダーについて研究したことから、共働きが一般的であるオーストラリアでどのように育児と労働が両立されているか知りたいと考えたからです。

サザンクロス大学ゴールドコーストキャンパスでの語学研修について

サザンクロス大学ゴールドコーストキャンパスの語学クラスは、語学学校として独立したものではなく大学の中で英語のクラスを開講しているものでした。授業は、90分×3コマを週5日受けていました。

学生は、学部や院への進学前に、英語を身に付けるために学んでいる方を中心としていました。出身国は、中国、日本、パプアニューギニア、タイ、ブラジルなど様々でした。交換留学で来ている大学生から、本国に家族を置いて単身赴任で来ている銀行マンまで幅広い年齢層でした。

半年から1年の交換留学が多い日本の学生に対し、MBA取得を目指して長期間留学している中国の学生が非常に多いことには非常に驚きました。中国の教育投資の熱心さを肌で感じるとともに、同じ東アジアの国といっても海外留学への教育投資という面で大きく差がついていることに危機感を覚えました。ただ留学することが良いことであるとは言えませんが、日本の学生も、海外の教育システムの中で教育を受ける機会を設ける必要があると考えました。

授業の内容は、文法・作文・会話練習・ディベートなどが行われていました。特に日本の教育との違いを感じたのは、授業の中で正しい英語を話すという前提はありますが、当てられたテーマに対して、自分なりの意見を持つことを求められることです。語学学校の授業であっても、ただ英語の習得を目的とする

だけでなく、自分の意見を発信し、グループでの活動が求められ、とても良い学びとなりました。



クラスメイトとの一枚

ホームステイについて

私のホームステイ先は、ゴールドコーストの在住のご夫婦と 13 歳、9 歳、6 歳のお子さんがいらっしゃるご家庭でした。家の中では、英語での会話が多かったです。ご夫婦ともにポーランドで生まれ、幼い時にオーストラリアに移住してきたという背景があるため、ポーランド語を習得させるために、しばしポーランド語で話しかけていらっしゃいました。

では、オーストラリアでの生活の様子を伝えるために、ホームステイ先での休日の 1 日を記述していきたいと思います。

朝は 6 時半頃起床し、朝食を食べます。朝食はコーンフレークに牛乳をかけたものを各自で食べます。小学生 2 人の分はお父さんが用意していましたが、一番上の娘さんは自分で用意して食べていました。私は朝食をごはんとおかずで食べる習慣があったので、コーンフレークの朝食にはあまり得意ではなく、10 時にはお腹が空いてしまいました。

朝ごはんの後、近所の浜辺に車で移動し、お散歩しました。朝早くから海水浴をしている人も見受けられ、海で泳ぐことが生活の一部になっている人も多いのだなという印象を受けました。

11 時から家族全員で教会に行き、日曜礼拝を受けました。礼拝の内容は、歌を全員で歌った後、子どもは遊びに移動して、大人は神父さんの講和を聞くというものでした。私は、宗教には疎い環境で育ったので、宗教が日常生活の中で自分の根拠となるという考え方は、とても新鮮でした。

帰宅し、昼食をとります。昼食は昨晚の夕食の残りのサラダやトーストを食

べました。

午後から、ホストファミリーの親戚と、一番上の娘さんと一緒に、朝とは別のビーチに連れて行って頂きました。オーストラリアは日差しが強いから、日焼け止めはしっかり塗るようにと繰り返し言われたのが印象に残っています。ゴールドコーストの海は、砂浜は白くさらさらで、水は透明で澄んでおり、適度に波もあり、とても美しかったです。

4時頃に家に帰ると、ホストファザーが夕食の支度をしてくださっていました。親戚も一緒に、バルコニーで夕日を見ながら夕食を食べました。

夕食後に、一番上のお姉ちゃんと一緒に教会のボランティアに行きました。ホームレスの方々に食事を配るボランティアで、20人程のボランティアの方々が野菜、肉、ご飯、パンなど、栄養のバランスの良いご飯を配っていました。ホームレスの方の人種比率でアボリジニの方の比率が高く、オーストラリアの負の歴史はいまだにこのような形で顕在化しているのだということを考えました。

帰宅後は、シャワーを浴びて、午後9時には就寝しました。

ホームステイで経験したオーストラリアでの生活は、日本の生活よりも、精神的に豊かであると思いました。日本と比べて広くプールやバルコニーがあるゆとりがある家や、家族や親戚が集まって食事を囲むことや、海での海水浴が生活の一部になっていることや、社会貢献活動が生活の一部になっていることなど、特に文化的に豊かな生活を送りやすい国であると思いました。その一方で、ホームレスの方にお会いしたことで、この国の負の部分も見えてきました。



ビーチ

埼玉・日本のことを伝える活動

ホームステイ中にお子さんの教育のためにと、日本の文化や地理、そして埼玉のことを積極的にホストマザーから尋ねられました。

子ども向けの世界地図を見せながら、日本の伝統衣装である着物や、お花見などの文化、国技の相撲の話などを話しました。特に末っ子の娘さんは、季節がオーストラリアと日本では逆であるということに非常に興味を持っていました。娘さんが日本や自分の知らないことについて、興味を持つ一助になれたことは、私にとっても非常に嬉しく思う出来事でした。

また、埼玉・日本の食を体験して頂くために、埼玉の名産品である狭山茶と銘菓の五菓宝を持っていきました。そして、夕食に日本食を作り、日本の家庭料理を味わって頂く機会も設けました。その際のメニューは、鶏の照り焼きとお味噌汁です。鶏の照り焼きは、子どもたちも喜んで食べてくれましたが、お味噌汁はあまり口に合わなかったようで、あまり食べてもらえませんでした。しかし、ご両親と一番上のお姉さんは、お味噌汁にも挑戦してくれました。日本料理の良さを伝えきれなかったことには後悔が残るのですが、日本のことに少し興味を持って頂くことができ良かったです。



つくった日本食

オーストラリアのジェンダー・イクオリティーについて

オーストラリアは日本と比較してジェンダー・イクオリティーが進んでいるという印象を受けました。その印象を受けた理由として、夫婦共働きが一般的であること、男性の家事育児労働への参加が多いことが考えられます。

まず、夫婦共働きができる理由として、日本のように夜遅くまで長時間働く労働慣行がないことが考えられます。オーストラリアの就業時間は午後5時までで終わるのが一般的です。そのため、お店が5時には閉店してしまいますという不便さはありますが、仕事後に、家族と過ごす時間を十分にとることが可能です。次に、男性の家事育児への参加が多い理由として、男性が仕事、女性が家事という性別役割分業意識が低いことが考えられます。朝はお父さんが朝ごはんの準備をして、小学校に子どもを送り、帰りはお母さんが子どもを迎えに行き、夫婦のうち早く帰ってきた方が夕飯の支度をするなどして、上手く分担していたという印象を受けました。

私はホストマザーと二人きりの時、オーストラリアと日本でのジェンダーの違いに関する話をしていました。その中で、オーストラリアと日本での価値観の違いや、自分が固定観念にとらわれていたことに気付かされたことが多々ありました。

日本では夫婦共働きであっても、子育ては母親の役目という意識が強いため、女性がキャリアを諦めざるをえないという話をすると、「その子どもの親であることに夫婦の間で差はないのだから、母親ばかりが責任を持つのは不自然だと思う。」や、「子どもの母親である前に、一人の人間なのだから、仕事をし、やりたいことをやって、自分の生きがいを持つべきだと思う。」とホストマザーに言われました。この意見を伺い、自分の中で、日本の女性はこれが当たり前だという価値観を内面化していたことに気付くことができました。日本での生活に戻っても、今の状況が当たり前だと思わず、この気持ちを忘れずにいたいと強く思いました。

おわりに

学生生活最後の春休みに、埼玉県の姉妹州であるクイーンズランド州での学びの機会を与えて頂いたことを心より感謝いたします。この経験を社会のために生かすためにも、語学力の向上に努めるだけでなく、様々な価値観を受け入れる広い教養を獲得していきたいと思えます。そして、この経験を自分の業務の中や、社会活動の中で生かしていきたいと思えます。

最後に、この事業でお世話になりました皆さまに心よりお礼を申し上げます。